

第一日 江戸・神奈川

江乃島紀行

仁杉とも
著

鎌倉市中央図書館

江乃島紀行

註釈

第一日 江戸ハ丁堀へ神奈川宿

鎌倉鶴が団、江の島詠の事、あまた
としおもひわたりかれど、向ふれとせの
ことわざじげく、また道の程もやゝ遠
ければ、心こもまかせざりしを、ことし
ばかりは向のやせる事もなくて、卯月
中の八日しののぬに出たつ。空の^雲かしづ
といと静かなり。

祈 祈事の としをかさねて 夏衣

今 日 けらおもひ立 たびべすゞしや

高輪にてしばし休ひる。東海寺・海安寺

の紅葉、過にし秋見しおもかげなど
このばれて、青葉しげれるわせも見ま

ほしけれど、行先のこぞぐまへに、立ち

よらず、わめず・あらうが崎をむ打過て、

大森なる梅園に遊び、六郷の舟渡しも

ことわすりかにこいへ、川崎の萬年屋と

いくるに立よりて、町の支度などと人のへく、

神奈川の井桁屋にやどりぬ。それより

むかひなる権現山にのぼり、海面はなにかに

- ・ことわざじげく：行為、仕事。
- ・へじげく：忙しへ

・ねぎ事：祈る事、願う事

・夏衣：夏衣を裁つの意

から「立つ」などに掛かる。

・海安寺：海晏寺

・神奈川宿井桁屋のことか

野毛山教の御事は又金沢が御つて
金沢へ向ひたる事そのもので本來
金沢へ又あくまでも田畠よりの事也
船を雇ひ同様かかふるが爲めに船家

第一日 神奈川～関～能見台～金沢

十九日晴夜の明一晩既而朝起れどもを
うちも高橋の旅館をとく浅間の山社
まで出で五時の人荒れいづら便り
和多金屋の金銀の石すかかにて金と
之る三陽よ御坐し山城のあわくま
庵とぞ能見堂ふらうるるの所り
京急電鉄より切込の難い
度勢は金馬、京急鐵道も其雲かと
やうやく御坐す。ゆくゆくのねくみ
大樹あつむつて御禪師の御子
東の御子とて御子の西瀬の八京小
御子とて八京の名とて近多き
おのれの御子の額面面神御の御子
多は御子の御子の御子の御子の御子
亭の御子の御子の御子の御子の御子の
御子の御子の御子の御子の御子の御子の

野毛・本牧のあたりを見れば、ゆふげの
けぶり心ぼそく立ち上り、後邊のぼ
ぎまに見かへれば、田畠もまた一つの氣を
なり。やゝ田も西にかたびらば元のやどり
傾宿

第一回 神奈川～関～能見台～金沢

十九日晴、辰の刻近き頃、此やどうを宿

立出、台の茶店を過て、浅間の御社に詣づ。富士の人穴と云へるもぬづらし。
程が谷より金沢の道、まがりくして關と
いへる立場にやすひ、山坂のけはしき

・関 横浜市港南区関

辰の刻
朝ハ時

道を過て能見堂にいたりぬ。この所の
景色、筆にもおよび難しとて、いにしへ
巨勢の金岡が筆を捨てんも、實にひと
わりとおぼゆ。爰にらですての松として
大樹あり。むかし、心越禪師この所に
來り給ひて、もれいしの西湖のハ景に
似たりとて、ハ景の名をぞつけられし
とかや。此寺の額の面、竹葉の詩、其筆
今に残れり。堂のかたはうに三壁といふ
亭あり。そしより法師の出来て、ハ景の
所々見よとて、遠めがねてふ物かしたり。
（こせ）
（かなおか）
（覚）
（唐士）
（筆捨）
（理）
（傍）
（うた）
（わくよう）
（じであたう）
（賃）

ていう

休むが爲めに舟を下りて居たのである。
はるか一葉の葉が、一頃明るい桟
橋の上を走る車を、見ゆる。身のまゝの
やうな、さうした風景で、何處か眼のまへ
て船の上の物語を、少社省と、
すこし毎日換へる。湯舟と、便りと、
壁窓の外を、よろよろと、見る。左の手
で、手紙を、もじりながら、机の上に、
うわさの如きを、書く。右の手は、
舟の頭の、手前の方へ、さしかかると、
あまく、また、また、おもむきを、かね
て、船の頭の方へ、さしかかると、
うわさの如きを、書く。左の手は、
舟の頭の、手前の方へ、さしかかると、
あまく、また、また、おもむきを、かね

これにてたゞ興をそへて、爰にじばし
休らひ、われより立てて、道すがり頼が

崎一葉の松、いにしへ頼朝公の植

給ひことかや。まがりへて瀬戸橋の

かたほりなる東屋といへるに至りな。今宵の

わざりをこゝに定めし、さて器手姫のふす

べ松とかや、その木の本に小社有。其あたり

より舟に棹れし、また漁舟をも伴ひて、

野島が磯、夏島の此方にて、汐の干

がたに下り立ち、せまぐり其外いろへの

貝などろくらひ、近もあたうのわらは

はや夕汐みち来べしとて、舟人のあわ

たゞしきりやうへし、名残つきぞれど

舟にうつりぬ。彼わらは共に菓子など

あたへ、すな取舟に網ひかせつゝ、ともに

入江へ帰るさの方に、一覽亭

とて、せむかの山の上なるとてがり見れば、

あいといすすぐれたる所のやが、筆にも詞にも

ひへし難し。南ははむかに安房・上

ふやの日々見渡され、浦賀の崎・猿島・

・上つられ：上総のいと

がけ

・すな取：漁の

・帰るさ：帰る時、帰り

がけ

萬里の鳥島へ、海海の波風よ
船の、山のそえ、福島乃宮幸
事象のうきよて、乙友平が神修
開き、漁とアリ、又元々
うち川の、風土の、うきよて、
何よ岸、てもや、かね、御天をさる
四萬石の、船ふう、うきよて、
人をす、せきの、あひの、ゆと、御天をさる、
棹舟、御天は、萬葉、海、萬葉の、
えも、の、萬葉の、御天をさる、遠西、
體大、湯の、御天をさる、御天を
百廢、急か、金持、御天をさる、御天を
主わと、日、御天をさる、御天を、
御天を

鳥帽子 えほ 島 島 • 夏 つま、海 うみ 面 おもて 突 つ 出、
東 とう

ひんがし北をのやめば、称名の遠寺・

小泉ほのかに見ゆ。乙友・平かた・野鳥・

洲 す わき わき • 濱戸 はまど を見おひし、又見かへれば、

内 うち 川より不一の ひり 雷 らい 声 こゑ のかにて、
白 しら 運 うん

向にたひくむやうもなし。詠歎 よみ やれど

口は不一の額にかくれ、たそがれ近しとて

人々のすすめむれば、この山をおひて、また舟に

棹 さ もし、瀬戸の東屋に帰りな。此家の

高 たか との遠田 とほ がね 取出で とりだ 遠近 おんき を

見めぐりす内に、田も疊はてぬれば、

燈火 とうか てりし湯 ゆ 治 じ 取得し魚など、壠のまゝに物して持出し

たれば、日頃は好みざれど、畠ぬぐひし、
とかくしきらぶりにござる。

• 物して：このじは「料
理して」

第三回

廿日晴、夫々に支度と人のへ辰のいふの頃に

宿 しゆ いのやぶつを出で、瀬戸明神に詣づ。この

みやしろは頼朝公勧請し給ふとかや。

またびは島弁財天の御 ご しろに詣づ。

此 こ いは政子御前の勧請なりとも。蛇木と

いふ幾木ともなく生たてり。夫より金沢

• 金沢侯：六浦藩主